

学生ボランティアの専門的なかわりを活用した不登校児キャンプの試み —専門的な事前指導が学生ボランティアと子どもに与えた影響について—

小林朋子（静岡大学教育学部）

小柴孝子（千葉県子どもと親のサポートセンター）

1. はじめに

不登校の児童生徒を対象としたキャンプ活動については、キャンプそのものの内容が子どもたちにどのような影響を与えたかについて野外活動や心理学的視点からこれまでに数多くの報告がなされている（例えば、兄井,2001；高橋,1993；大沢・西田・財満・東方田・岩崎,1990；飯田・関根,1992；関根,1994；笠井,2003,etc）。しかし、キャンプの内容ではなく子どもに関わるボランティアスタッフに対しての事前指導や、さらにキャンプ活動中にボランティアスタッフがどのようにかわることによって子どもたちに変化をもたらすことができるのかという側面については検討されていない。

学校心理学におけるボランティアヘルパーとは、「職業上や家族としての役割とは直接的には関係なく、子どもや教師、保護者にとって援助的なかわりを自発的にするものである」とされている（石隈,1999）。広義のボランティアヘルパーは、子どもの友人であったり、タバコ屋のおばあちゃんだったりする。「近所の子どもを見かけたら何だかとても元気のいい顔をしていたので声をかけて話を聴いた」というかわりはこのボランティアヘルパーによるかわりとして分類することができる。Brammer（1973）はこのボランティアの定義をもう少し狭い意味でとらえ、「短期間の基本的援助技術の訓練と、機関のオリエンテーションを受けた無報酬の人」と定義している。

応用行動分析を用いた内容に基づいて保護者、施設のスタッフや教師などを対象としトレーニングを行い、その対象者の援助内容の変化については多くの報告がある(Kneringer, M.&Page,T.J.,1999；Alberto,P.A.&Troutman,A.C, 1986,etc)。日本でも障害のある子どもを持つ保護者に対しての介入（免田・伊藤・大隈・中野・陣内・温泉・福田・山上,1995；菅野・小林,1996）を中心に、地域における非専門家に対するトレーニングが報告されるようになってきている。具体的にボランティアスタッフに介入しそれを評価した研究に関しては、小沼(1999)が応用行動分析に関して専門的な知識や経験を持たない大学生に対して勉強会を通して知識を提供し、障害のある子どもの地域での療育活動のボランティアとして活動させたものなどがある。

ソーシャルスキルに乏しく非社会性の問題を持つ子どもたちは、対人関係に不安と緊張を感じやすく、人と関わるスキルを身につける必要があることが指摘されている（小林・相川,1999）。そこで、スタッフである学生ボランティアが応用行動分析の知識を活用し、キャンプに参加している子どもたちの対人的な行動を強化することによって子どもの社会的スキルや自己効力感が向上する可能性がある。つまり、キャンプの内容というよりはスタッフのかかわりによって子どもの変化を促すものである。

そこで、不登校の子どもたちを対象としたキャンプ活動に参加する学生に対し応用行動分析に基づいた対応に関する知識を身につけ、日常生活で実践するように求める内容の事前指導を行った。そして、事前指導で学んだ知識や実践に基づいてキャンプ活動では積極的に子どもの対人的な行動を強化することを行った。本研究では、この実践における学生ボランティアに対する事前指導の内容と、事前指導やキャンプ活動を通じた学生ボランティアの変化、さらに学生ボランティアのかかわりによって子どもたちの社会的スキルおよびセルフ・エフィカシーの及ぼす影響、つまり子ども側の変化について明らかにし、学生ボランティアに対する専門的な事前指導のあり方について考察したいと考えた (Fig.1)。

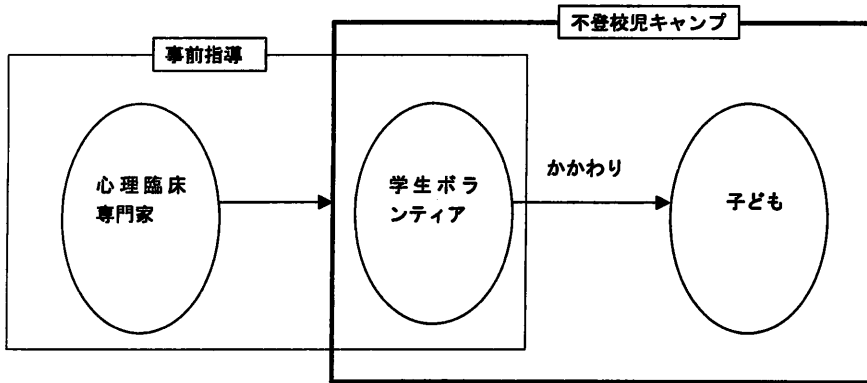


Fig.1 研究の概要

II. 方法

1. 学生ボランティアに対する事前指導の概要

(1) 学生ボランティアについて

不登校キャンプのスタッフへの参加を希望した千葉県内の大学2,3,4年生、計6名を調査の対象とした。これまでに不登校の子どもたちを対象としたボランティア活動を経験した学生はいなかった。

(2) 事前指導の内容

学生ボランティアに対する事前指導は、不登校キャンプが始まる1ヶ月前の2002年10月から11月にかけて計5回行った。事前指導は、主に応用行動分析の理論に基づいて「強化について」「強化の方法」「強化子の選定」といった内容についての授業を行った (Table1)。また、授業では専門用語を覚えるよりもこうした理論を実際に用いることができるようにすることを目的としていたため、小沼(1999)と同様に応用行動分析の専門用語を極力使用しないで、一般的にわかりやすく解説を行った。さらに、学生ボランティアが事前指導で学んだ知識をより実践で活かせるよう日常生活の中で友人や家族の望ましい行動を強化するホームワークを課し、「実践シート」に記入してもらうようにした。さらに最後の事前指導では、キャンプの性質、社会的スキルの視点や学生ボランティアのかかわりやすさ等をふまえ、このキャンプ活動で伸ばしたい子どもたちの行動についての話し合い標的行動を設定した。その結果、強化したい子どもの標的行動は、「あいさつをする」「ありがとうと言う」「他者に話しかける」など8項目

となった (Table2)。なお、すべての事前指導では指導担当者が作成したプリントを用いて実施された。

Table 1 学生ボランティアに対する事前指導の内容

第1回	行動に対応するための基本的な考え方
第2回	強化について
第3回	強化子について
第4回	プロンプトについて
第5回	社会的スキルおよびキャンプで伸ばしたい子どもたちの行動について

Table2 学生ボランティアが強化した子どもの対人的な行動

①	みんなへのあいさつ
②	他者を助ける・手伝う
③	ありがとうと言う
④	自分の意見を言う
⑤	他者のいい所を見つけて誉める
⑥	笑顔
⑦	他者を誘う
⑧	他者に自分から話しかける

注) 直接的な対人的な行動だけでなく、その行動があることによって対人的な行動が誘発されやすいと思われる行動も含めた。

2. 不登校キャンプの概要

(1) キャンプ参加者

C県K青年の家主催の不登校児キャンプに児童生徒23名が参加した (小学生2名,中学生21名;男子14名,女子9名)。なおこれまでにこうしたキャンプを経験していた子どもは23人中15人であった。

(2) キャンププログラムの内容

本キャンププログラムは、2002年11月に2泊3日の日程で行なわれ、特別養護老人ホームでのボランティア活動やハイキング活動などで構成された。一方、保護者は子どもたちと別日程で過ごすことが多く、夜には保護者懇談会が実施された。参加スタッフは、学生ボランティア、小・中学校教諭、教育相談室相談員、不登校問題研修員 (訪問相談員)、学生指導担当者、であった。

(3) 子どもへの対応

学生ボランティアは、キャンプ中、Table2で示した子どもたちの対人的な行動に対して積極的に誉めることを行った。また、キャンプ活動の最後に1人ひとりの子どもたちについてよ

かったことやがんばったことを取り上げた賞状を手渡し、子どもたちのやれたところやがんばれたところを積極的に評価した。

3. 評価方法

(1) 学生に関する評価方法

① KBPAC尺度 (志賀,1983)

応用行動分析に関する知識の習得度を測る尺度で、得点が高いほど知識を習得できたことになる。この尺度を、事前指導開始前 (PRE) と事前指導終了後・キャンプ活動直前 (POST1)、の計2回実施した。

② 一般性セルフ・エフィカシー尺度(坂野ら,1986)

学生のセルフ・エフィカシーを測る尺度として用いた。この尺度は、「行動の積極性」「失敗に対する不安」「能力の社会的位置づけ」の3つの下位尺度で構成されており、得点が高いほど下位尺度におけるエフィカシーが高いことになる。この尺度を事前指導終了後・キャンプ活動直前 (POST1) とキャンプ活動直後 (POST2: POST1 から1W後) の計2回実施し、それぞれの下位尺度ごとに得点を算出した。

これらのデータをSPSSver.10により分析を行った。

(2) 子どもに関する評価方法

① 児童用社会的スキル尺度

庄司 (1994) の児童用および中学生用社会的スキル尺度について項目を検討し、キャンプに参加する子どもたちの社会的スキルのレベルを踏まえ、児童用社会的スキル尺度を用いることにした。この尺度は、「共感・援助的かかわり」「積極的・主張的かかわり」「からかい・妨害的かかわり」「拒否・無視的かかわり」の4つの下位尺度で構成されており、得点が高いほど下位尺度における社会的スキルが高いことになる。この尺度をキャンプ開始前 (PRE) とキャンプ終了後 (POST) の計2回実施し、それぞれの下位尺度ごとに得点を算出した。

② 一般性セルフ・エフィカシー尺度(坂野ら,1986)

学生の評価に用いた尺度を同様で、この尺度をキャンプ開始前 (PRE) とキャンプ終了後 (POST) の計2回実施した。

これらのデータをSPSSver.10により分析を行った。

III. 結果と考察

1. 学生ボランティアの変化に関して

(1) KBPAC

学生の得点についてT検定を行ったところ、PREとPOST1の平均の差は1%水準で有意であった ($t(5)=-5.543, p<.01$) (Table3)。このことから、事前指導を通して学生が応用行動分析に関する知識を習得できたことが明らかになった。

(2) 一般性セルフ・エフィカシー尺度

下位尺度ごとにT検定を行ったところ、「行動の積極性」において、5%水準で有意であった ($t(5)=-2.712, p<.05$)。しかし、他の下位尺度では有意差はなかった (Table3)。このことから、学生がキャンプ活動前では不登校の子どもと初めて接するということで「うまく接する

ことができるのだろうか」という状況であったが、実際に活動してみてその不安が軽減でき、積極的に子どもたちと関わるできるようになったと感じていたことが示された。

Table 3 学生ボランティアの変化

			PRE		POST1		POST2		t1	t2
			M	SD	M	SD	M	SD		
KBPA			6.17	1.60	13.67	2.42	-	-	-5.543**	-
一般性セルフ・エフィカシー	失敗に対する不安	-	-	-	3.83	2.14	4.33	1.86	-	-1.17
	行動の積極性	-	-	-	1.67	1.03	2.50	1.22	-	-2.712*
	能力の社会的位置づけ	-	-	-	2.17	0.75	2.33	0.82	-	-0.54
					t1=PRE vs Post1		t2=Post1 vs Post2		*p<.05	**p<.01

2. キャンプに参加した子どもの変化に関して

(1) 生徒用社会的スキル尺度

下位尺度の得点をSPSSにより分析したところ有意差は認められなかった。

(2) 一般性セルフ・エフィカシー尺度

キャンプ前後の「行動の積極性」「失敗に対する不安」「能力の社会的位置づけ」を下位尺度ごとに分析をしたが、有意差は認められなかった。そこで男女別に分けて分析したところ、女子の「能力の社会的位置づけ」において有意傾向であることが示された ($t(23)=-2.29, p<.05$)

(Table4)。このことから、特に女子がキャンプ中に「自分の良さ」を学生ボランティアとの関係で「誉められた」「認められた」経験をし、集団の中での自分の相対的位置(自分の居場所)を見つけることができた可能性が示唆された。また、女子のこうした有意傾向は、性差の違いによりキャンプ経験の一般性自己効力感への影響があることが飯田・坂本・石川(1990)により指摘されており、本報告でも同様の傾向が示されたと言える。

Table 4 キャンプに参加した子どものセルフ・エフィカシーの変化

		PRE		POST		t
		M	SD	M	SD	
男子	失敗に対する不安	3. 61	1. 88	3. 21	2. 26	1. 01
	行動の積極性	2. 57	1. 41	2. 00	1. 57	1. 163
	能力の社会的位置づけ	1. 61	1. 44	1. 50	0. 94	0. 28
女子	失敗に対する不安	2. 33	2. 06	3. 22	1. 98	-1. 58
	行動の積極性	2. 00	1. 73	3. 22	1. 86	-1. 74
	能力の社会的位置づけ	1. 00	1. 32	1. 56	1. 42	-2. 29*
						*p<. 05

IV. まとめ

事前指導を通して学生の応用行動分析に関する知識は上昇し、学生の日常生活においても友人や家族などの人を通して多くの応用行動分析的な実践が行われるようになった。さらに活動を通して初めて接する不登校の子どもへの不安が活動を通して低減され、積極的に子どもたちに関わるようになったと感じていたことがわかった。今後は、応用行動分析的な知識の習得によって学生の子どもたちに対してのかかわりが具体的にどのように変化したかについて質的な視点からも検討される必要がある。

一方、子どもたちは不安を抱えながらも決断をしてキャンプに参加するため、キャンプへの参加が社会復帰への第一歩の意味を持つとも考えられる。子ども側から見て社会復帰の第一歩

で出会う「人」の存在は大きく、またスタッフ側から見ても「子ども」へのかかわり方から学ぶものは大きい。今回のキャンプでは、学生ボランティアスタッフは、事前指導で対応に関する知識を学んできた。自分の良さを認められた子どもは「自分」と「他人」とを比較をしながら、集団の中で相対的位置（自分の居場所）を見つけることができたと考えられる。子どもの良さを「誉める」「認める」という一歩踏み込んだかかわりは、子どもが自分の問題や悩みを抱えながらも、集団（社会）の中で自分らしく生きていく力を育てていくのではないだろうか。

しかし、キャンプに参加した子どもたちの社会的スキルに変化はなく、またセルフ・エフィカシーにおいても女子のみで男子においてはエフィカシーの上昇が示されなかった。これは2泊3日のキャンプでは期間が短く、子どもが集団生活に慣れているうちに終わってしまい、スタッフのかかわりが反映する前に活動が終了してしまうことが考えられる。長期的なキャンプにおいてスタッフのかかわりが与える影響について検討が必要であろう。

引用文献

- Alberto, P.A. & Troutman, A.C. (1986) *Applied Behavior Analysis for Teachers*, 佐久間 徹・谷晋二監訳, はじめての応用行動分析, 二瓶社.
- Brammer, L. (1973) *The Helping Relationship: Practice and Skills*, 対馬忠・対馬ユキ子訳, 人間援助の心理学, サイマル出版会.
- 兄井彰 (2001) 不登校児童・生徒を対象としたキャンプ療法の効果, 福岡教育大学紀要, 50 (5), 85-90.
- 飯田稔・坂本昭裕・石川国広 (1990) 登校拒否中学生に対する冒険キャンプの効果, 筑波大学体育科学系紀要, 13, 81-90.
- 飯田稔・関根章文 (1992) キャンプ経験が児童の一般性自己効力に及ぼす効果, 筑波大学体育科学系紀要, 15, 93-102.
- 石隈利紀 (1999) 学校心理学, 誠信書房.
- 笠井孝久 (2003) 不登校児キャンプに参加する子どもたちⅡ—不登校児の居場所としてのキャンプ—, 千葉大学教育実践研究, 10, 57-64.
- 小林正幸・相川充 (1999) ソーシャルスキル教育で子どもが変わる—小学校—, 図書文化.
- 小沼芳明 (1999) 知的障害児の療育活動におけるボランティアスタッフへの介入—介入プログラムの実施と効果の検討—, 筑波大学大学院教育研究科修士論文 (未刊行)
- 免田賢・伊藤啓介・大隈紘子・中野俊明・陣内咲子・温泉美雪・福田恭介・山上敏子 (1995) 精神遅滞児の親訓練プログラムの開発とその公開に関する研究, 行動療法研究, 21 (1), 25-38.
- 大沢多美子・西田行・財満義輝・東方田芳邦・岩崎学 (1990) 思春期不登校児のための活動集団療法, 集団精神療法, 6 (2), 135-140.
- 坂野雄二・東條光彦 (1986) 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み, 行動療法研究, 12 (1), 73-82.
- 関根章文 (1994) キャンプ経験が児童のLocus of Controlと一般性自己効力に及ぼす影響, 筑波大学体育科学系紀要, 17, 177-183.
- 志賀利一 (1983) 行動変容法と親トレーニング (その知識の獲得と測定), 自閉児教育研究, 6, 31-45.
- 菅野千晶・小林重雄 (1996) 発達障害児の親指導プログラムに関する検討—児童相談所におけ

るプログラムの実施一,行動分析学研究,10(2),137-151.

庄司一子 (1994) 子どもの社会的スキル, 菊池章夫・堀毛一也編著, 社会的スキルの心理学
川島書店

高橋知音 (1993) キャンプ療法による登校拒否児の樹木画の変化ーバウムテストの全体的印象
による評価ー,カウンセリング研究,26,19-28.

<要約>

不登校の子どもたちを対象としたキャンプ活動に参加する学生に対し応用行動分析に基づいた対応に関する事前指導を行った。そして、事前指導で学んだ知識や実践に基づいてキャンプ活動では積極的に子どもの対人的な行動を強化することを行った。その結果、学生ボランティアは事前指導を通して応用行動分析に関する知識を習得し、それ以降もその知識が維持されていることがわかった。一方で、子どもたちの変化に関しては、女子においてキャンプ中に「自分の良さ」を学生ボランティアとの関係で「誉められた」「認められた」という経験をしたことが示された。しかし、男子においては変化がなく、キャンプの期間などの要因からも検討する必要があることが明らかになった。

A camp for children with social difficulties involving specially trained student volunteers: Effects of special pre-camp guidance given to student volunteers on children with social difficulties.

Tomoko KOBAYASHI (Shizuoka University)

Takako KOSHIBA (Chiba prefectural support center for children and parents)

Before attending a camp for children with social difficulties, student volunteers received guidance on how to deal and interact with children based on the concept of applied behavior analysis. Based on the knowledge and practice gained through this pre-camp guidance, student volunteers attempted to actively improve the social behavior of the children. The results showed that the student volunteers acquired knowledge of applied behavior analysis and retained this knowledge after the camp. As to the changes experienced by the children with social difficulties through interactions with the student volunteers, girls became aware of their personal attributes and experienced “praise” and “affirmation”, whereas boys did not experience these changes.